

《第 474 回 (2020 年 9 月 10 日) 子どもの本の読書会記録》 参加者：9 人 文書参加：3 人

時間：10:00~11:30 場所：オーテピア 4 階研修室

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』 ブレイディみかこ／著 新潮社

今月の課題図書は、昨年刊行されるやいなや、数々の賞を受賞しベストセラーとなった『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』。日本人の著者とアイルランド人の夫との間に生まれた息子の、イギリスでの学生生活を綴ったエッセイです。

息子の「ぼく」が、進学した「元・底辺中学校」で出会うのは、国籍も人種も思想も家庭環境も性的志向も多様なクラスメイトたち。「多様性は物事をややこしくするし喧嘩や衝突も絶えない」という著者の言葉通り、「ぼく」は学生生活の様々な場面で、社会問題を体験していくことになります。しかし、著者はこうも言います。多様性はうんざりするほど大変でめんどくさいけど、無知を減らすからいいことだ、と。格差や差別などの問題に日常的にぶち当たりながらも、悩み、考える「ぼく」や著者の姿を通して、自分の考えや行動もアップデートされる作品です。

次に、読書会に参加された方の感想をご紹介します。

- 母と息子の、のびのびとした関係がうかがえてうらやましい。こども達がいきいきと、自分のやりたいことをやっているのが分かる。イギリスと日本の教育の違いにも驚いた。中学で演劇の授業があるなんて、ユニークで、日本では考えられない。
- 難しい問題がたくさん含まれていたが、エネルギーに溢れていて、楽しく読めた本。大人が思っているよりも、こどもは毎日を体当たりで生きている。無知ではなくなることで成長できるということを、親がこどもに教えるシーンが好き。
- 私たちがニュースで見るとな問題が、イギリスの中学生の日常レベルで出てくる話だということに驚いた。親がこどもに問題解決のヒントを与えて、こどもも自分の頭で考えて問題に立ち向かっていく様子がいい。自分の判断基準を測れる本。
- 章ごとに、いろんなことが詰まっている。日本とイギリスの教育の違いには衝撃を受けた。多様性のある社会だからこそ、アイデンティティを確立するための材料を教育のなかで与えているのかな。

●楽しく読めた。『決壊』（平野啓一郎／著）と並行して読んだ。ボランティア活動で、著者が古くなった制服を繕うシーンにはとても感動した。行方不明児童の問題が取り上げられていたが、それは高知でもあったこと。

●読書会の中で取り上げたい本のなかに、LGBTをテーマとして取り扱ったものがあったが、その本を提案しようと思った矢先、この本が出版された。今まで抱えていた問題が、すっと胸に落ちるような本。中高生にもぜひ読んでもらいたい。

●「ぼく」が、差別を勝手な価値観で「かわいそう」と片付けずに向き合うシーンが印象的。冷静に物事を判断し、考えることができている。無知が差別を生み、行き過ぎた正義はいじめにつながるということが分かった。

●印象的だったのは、「ぼく」の友人のダニエルがいじめに遭うシーン。ダニエルに何かされた子ではなく、関係ない子たちがSNSで悪口を書いたりする。正義は、使い方によっては人を罰することになってしまう。

●イギリスの中学校生活は色々ありすぎてびっくり。多様なこどもだらけで、色々な事件が毎日起こる。絵本『タンタンタンゴはパパふたり』が、イギリスの保育業界では『はらぺこあおむし』と同様の名作だということにも驚いた。

●イギリスは、外から見るような感じとは違って、貧富の差、人種の差がある。読んでいるうちに、この本はいつの時代のことを書いているのかな？と、思わず本の奥付を確認した。今も、差別や区別がはっきりある。

●面白く、考えさせられる作品。「ぼく」はとても聡明で、その振る舞いと配慮は見習いたい。アイデンティティに固執しすぎないことが、争いをなくすために大切なのではないかな。また、マルチカルチュラルな時代では、想像力が大事だと思った。

次回 10月8日(木) 10:00~11:30 オーテピア4階集会室  
□『北欧神話 新版』 P.コラム/作, 尾崎 義/訳 岩波書店